

園田

ワキ 社人

ツレ 園田

ツレ 神子

トモ 社人の従者

ワキヅレ 寄手

シテ 神体

地は 尾張

季は 雑

「抑是は津島の天王に仕へ申す社人にて候。今日は御神事にて候ふ程に。各罷り出で御神事を執り行はゞやと存じ候。

「岩間伝ひの谷川も。く。瀬をせく水や増さるらん。

「是は尾州の傍に園田と申す者にて候。さても天王の神子に。月光女と申す神子の息女に。玉光女と申す神子。国中一の美人にて候。あはれくと存

じ候へども。一度も常は神前に出ださず候。今日は御神事にて候ふ間。神前に出ださぬ事は候ふまじ。参詣申し何ともして奪ひ取らばやと存じ候。

「足引の。山した滝つ岩波の。く。心碎けて数々の思ひの末は如何ならん。げにや人も又。踏み見ぬ山の岩がくれ。流るゝ水を我袖に。洩らさばそれぞ命の。限りなるべきとばかり。思ふ心のはかなさよ。く。

ワキ 「神垣は神の御室の榊なれば。神の御前に繁りあふ。
貴賤群集ぞ有難き。

園田 「我は又。さらぬやうにて立ち寄り見れば。げにも
玉光女なり。心も空にかはり。それく宮人御神
楽を。急ぎ給へと勧むれば。

地 「其色々の役々の。拍子を揃へ歌ふなり。

ミコ 「榊葉の。香をかぐはしみとめくれば。八十氏人ぞ
円居せりける。
(神楽)

ワカ 「みてぐらは。我にはあらず天にます。豊岡姫の宮
のみてぐら。豊岡姫のみてぐらなり。

地 「さるほどに。く。折節よしと。一同に走り寄り。
とうく神子を貴賤の中に。飛鳥の如く飛び翔つ
て。行方も知らずぞなりたりける。

ワキ 「何と申すぞ。玉光女を奪ひ取りて行くと申すか。
やるまじいぞ。

トモ 「暫く候。今日は御神事なり。明日はさし寄せ腹切

らせん。

ワキ

「げにく是も理りなり。神慮もさぞな神楽歌に。祝ひこし神は祭りつ明日よりは。組の緒をしめ遊び太刀はき。今日は還御急ぎつ。」

地

「明日はさし寄せ園田を。く。討ち取り本望を達せんと。詮議をなして帰りけり。く。」

ヨセテ

「明くる空。遅しと告ぐる庭鳥の。八声の関をつくりけり。」

ワキ詞

「如何に園田たしかに聞け。天王よりの御使に。御櫛持たせて参りたり。出でよや出でよと罵りけり。」

園田

「園田是にあり。何のための御使にて候ふぞ。」

ワキ

「何のためとは玉光姫。あまりに暗々と奪はれたる。無念散ぜん為めぞとよ。」

園田

「神慮に更に対し申さず去りながら。面々をたゞにてはいかで帰すべき。此の矢一筋うけて見よと。」

地

「十三束を打ちつがひ。く。よつ引き放つ其矢の。」

不思議や行方も白真弓。あら面目なや候。さて
は早運櫛弓。くぞと心得て。弓切り折つて遙に
投げ捨て。大太刀おつ取り。追手より切つて出づ
れば。勇み勇む。社家の若武者。打つ太刀を受
け流し。飛べば横太刀出ださせず。さつとむすび
上げ。一太刀に勝負を見せにけり。

ワキ
「然れども宮人。

地
「然れども宮人。身命を軽んど。長刀とりのべ。

園田を目がけてかゝりければ。当の矢一筋かへさ
しく。待てよや待てと雲の上に。大音声こそ聞
えけれ。

シテ
「神体大牛に乗じ給ひ。

地
「神体大牛に乗じ給ひ。汝まさに。射る矢は社頭の
扉を貫く。当の矢一筋。神通方便の御弓に打ち番
ひ。放ち給へは。雷電まさに落ちかゝる如く。天
に仰ぎ地に倒れ。逆さまに櫓より。遠近の土とな

る。

ワキ
「此時宮人。

地
「此時宮人。あふぎて神恩の高きを感じ。臥して結
縁の深き川波に。うづまひめぐる。く。水の煙
に立ちまぎれて。神は上らせ給ひけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第四輯』大和田建樹 著